

## 幼児教育における創造的音楽表現の可能性

### —創造的表現とは何か？—

前田 真由美  
(兵庫教育大学大学院)

#### I はじめに

領域「表現」では、子どもの創造性を育むことがねらいとされている。創造性とは一体何だろうか。また、子どもの創造性を育むための保育内容とはいかなるものなのだろうか。ここでは、Paynter が構築した「Creative Music Making」という音楽カリキュラムを導きの糸として、創造的表現について考えてみたい。

#### II Paynter の Creative Music Making

まず Paynter という音楽教育者について少し述べたい。Paynter は 1931 年にロンドンで生まれ、数年間の教職経験の後、1969 年にヨーク大学音楽学部教授となった。1960 年代から 1970 年代にかけてのイギリス教育界は、創造性教育を主眼とした大きな変革期を迎えており、様々な教科の中で子どもの創造的な可能性を引き出し、育むための大胆な試みが次々と行われていた。Paynter の仕事は、当時の創造性教育で他教科から大きな遅れを取っていた、演奏技能中心主義の音楽科を根本から変えることにあった。

このような新しい音楽教育の模索は、Paynter 単独の試みというより、むしろ欧米を中心とした音楽教育全体の動向として捉えることができる。なぜなら、Paynter が『Sound and Silence』を出版した 1970 年には、また、同時に Dennis の『Experimental Music in Schools』(1970) や Schafer の『The Rhinoceros in the Classroom』(1975) など、従来の音楽教育を乗り越えようとする試みが相次いで現れてきたからである。

しかし、その乗り越え方はそれぞれ異なったかたちで行われたのであり、Paynter の Creative Music Making を考える上で、やはりその特異性に注意を向けることが重要であろう。大まかに整理すると、Dennis.B が現代前衛音楽の語法（特に記譜法）に親しむことを目指し、また Schafer が積極的に身の周りの音に耳を傾けてサウンド・スケープ（音環境）を再構成してゆくことを目指したのに対し、Paynter の関心は、子どもの日常生活の経験を重視し、子どもが主体的に創造的に音楽を作ることを通して音楽の構成要素や構成原理に気づいてゆくことに向けられていたと

言えるだろう。すなわち、Paynter の Creative Music Making は子どもが主体的に音と関わることを通して、音楽そのものに迫ってゆこうとする音楽活動として捉えることができるだろう。

\* \* \*

「Creative Music Making」という言葉は『Sound and Silence』の中で使われ、Paynter 自身によって「何よりもまずそれは、個々の生徒にとって個性的であるようなことを表現する方法である」と説明されている。しかしこの説明だけでは、少し不十分のように思われる。なぜなら、「創造性」を子どもの個性的表現として捉え、Creative Music Making を従来の一斉指導型に逆行するような、子どもの個性的で新奇な表現の育成のみに重点を置いた方法だとする誤解を招きかねないからである。実際、わが国では『Sound and Silence』が紹介された当初、それは子どもが好き勝手に表現することに留まってしまし、ねらいが不明確な指導性の低い音楽活動として位置づけられることもあったようである。

しかし、Paynter のいう「創造性」とは本来、子どもが個々にそれぞれ違う表現をすることを指すのではなく、むしろ個々に表してゆくのか、皆で表してゆくのかをも含めた音に対する全ての表現、つまり、子どもの音楽表現そのもののあり方に関する可能性を広げようことを意味するのではないだろうか。そして、Paynter が構築した「Creative Music Making」は、まさにこの概念が基になっていると言えるだろう。では、それは具体的にはどのようなものなのだろうか。ここでは、大きく 2 点が挙げられるように思われる。ひとつは「創造のプロセス」についてであり、もうひとつは「創造の方法」についてである。

#### 1) 選ぶこととしりぞけること

創造のプロセスについては「選ぶこととしりぞけること」であり、創造の諸段階で素材を評価し、確定することである。それは本質的に実験の場なのだ。」と述べられている。

Paynter は「選ぶこと (selection)」、「しりぞけること (rejection)」という言葉を用いている。「selection」は一般的な choose よりも「厳しい選択」を指し、最も相応しいものを注意深く選ぶことを意味する。またこれは生物学的には「淘汰」を指し示す。「rejection」には、与えられたものに対する拒絶や廃棄という強い拒否と、目的に見合わずに置き置いておく、使わないで置くといった比較的穏やかな拒否の2つの意味が考えられる。

目的に適う素材をじっくりと「選ぶこと」から始まる表現では、その他の素材は知らぬ間に「しりぞけられる」ことになるだろう。ここでは後者の拒否が自然と行われていると言えよう。また、目前にある素材を「しりぞける」ことをきっかけに、良いアイデアが浮かび素材が「選ばれてしまう」表現もあるだろう。ここでは前者の拒否が発端となっていると言える。このように、創造的表現では「選ぶこと」と「しりぞけること」の両者が絡み合っていることを通して、ふさわしい素材が吟味されてゆく。つまり、「選ぶこととしりぞけること」は、どちらか一方だけで説明するのは難しく、相互に影響し合っていると言えるのではないだろうか。

また、Paynter は「素材を評価し、確定すること」と述べているが、この「素材」とは何を意味するのだろうか。彼は「音の真の‘基礎’は音楽の素材—音と沈黙 (sound and silence) —の探求を通してはぐくまれるべきである」と述べている。つまり、子どもたちは主体的に創造的に音素材と関わることで、音楽の本質とも言える音と沈黙という「なまの素材」と向かい合いながら音楽を作り上げてゆくのである。

## 2) 総合的な即興表現

創造の方法としては「いろいろな楽器や音楽的アイデアなどの素材にいきなり立ち向かい、即興演奏による実験を繰り返しながら音楽作品を作り上げていくというやり方」と述べている。つまり、子どもたちは練習など行わず、その場に応じた表現が求められるのである。また彼は、このような音素材を使った「実験」そのものが「即興演奏」へ発展し、それが「一つの作品」になる可能性について指摘している。子どもの即興演奏そのものを一つの音楽作品として捉えようというのは興味深い視点ではないだろうか。

そして、このような子どもの即興表現に対する教師の判断としては2点挙げられている。第1は、子どもたちの音楽に含まれている技法について、教師の音楽

的知識に基づいて判断する方法である。そのためには教師は自ら即興表現を行い、数多くの音楽を聴かなければならないだろう。教師には子どもと同じように音を探求し「音楽そのもの」に参加してゆく必要性が感じられる。第2に、音楽のまとまりを見るという方法である。教師の役目は「彼ら（子どもたち）の音楽にまとまりがつくように導いてやること」と説明されている。そして彼が指摘するように、そのまとまりには「統一」のとれた音楽を作ることと、その音楽に様々な「変化」をもたらすことが含まれている。つまり、教師は子どもたちと共に「統一」と「変化」のバランスを保ちながら、一つのまとまり（音楽作品）を作り上げてゆかなければならないだろう。

## III おわりに

以上において、Paynter の「Creative Music Making」を導きの糸として創造的表現について考えてきた。

創造のプロセスでは、子どもたちが「選ぶこととしりぞけること」を通して「音素材」を自ら判断し表現してゆくことについて述べた。また創造の方法では、子どもたちの「総合的な即興表現」を音楽作品として捉えること、そしてそこには「統一」と「変化」が含まれていることについて述べた。

「創造性」という言葉は広義に解釈されており理解するのは非常に難しいと言えるだろう。しかし、このような Paynter の具体的な洞察は、子どもの創造的表現を考える上で、今後も示唆を与えてくれるように思われる。

## 文献

- Paynter, J. & Aston, P. 『音楽の語るもの：原点からの創造的音楽学習』（山本文茂・坪能由紀子・橋都みどり, 訳）音楽之友社 1982 （Paynter, J. & Aston, P. *Sound and Silence: Classroom Projects in Creative Music*. Cambridge University Press. 1970）
- Paynter, J. 『音楽をつくる可能性』（坪能由紀子, 訳）音楽之友社 1994 （Paynter, J. *Sound and Structure*. Cambridge University Press. 1992）
- 坪能由紀子「音楽教育の現代化への道 2—イギリスの新しい音楽教育（1）—」『季刊音楽教育研究 36』1983 (pp 118-130)
- Hornby, A.S. 『OXFORD : Advanced Learner's dictionary』Oxford University Press 1995